

## 家族の酒害相談活動

### ●酒害相談機会

1. 保健所からの相談依頼による電話相談、面接相談
2. 専門クリニック等医療機関からの紹介による電話相談、面接相談
3. 自助グループホームページの相談窓口経由の電話相談、面接相談
4. 自助グループ相談事務所での電話相談、面接相談
5. 断酒例会、ミーティングでの面接相談
6. 地域自治体による酒害相談会での面接相談
7. 酒害啓発セミナー等での面接相談
8. 自宅に「アルコールの悩み相談」の場を設置

### ●家族による酒害相談の利点

1. 最初に酒害相談に現れるのは家族が圧倒的に多い。  
家族がアルコール依存症の発見と治療の出発点として極めて重要。  
かつ治療継続のキーポイント。
2. 家族でなければわからない酒害者家族の実態。  
家族同士ならば、同じ立場として相互に共感を持って相談できる。
3. 仲間として踏み込んだ相談が可能になる。
4. 本人への対処の仕方を実体験から助言できる。
5. 一緒に行動することで、自助グループへの参加を進めやすい。
6. 家族だけの集まりを持っている。安心できる場の提供に繋がる。
7. 一人ひとりでは無力。集団としての回復力を期待できる。

### ●問題点

1. 保健所の酒害者家族相談会の参加人数が減少傾向にある。→踏込不足
2. 「酒害相談」は、一般には抵抗感があり、また分かりにくい。  
「酒害相談」から「お酒でお困りの方相談」へ→確実に相談者が増加する。
3. 行政相談窓口で、保健師だけで処理せず、必ず当事者家族に繋げること。
4. 相談窓口での酒害相談内容の充実と属人性のない方針の一貫性が必要。
5. 受診・治療に関する家族と本人のギャップ解消。  
本人は一般病院を望み、家族は専門病院・自助グループ指向。  
→医療機関の連携が必要。  
専門医療受診・自助グループ参加の切り札は家族にある。
6. 一部専門クリニックの抱え込み防止対策が必要。→ナイトケアの問題
7. 家庭内の問題が大きいほど（生活苦、DV、飛行、不登校、引きこもり等）  
自助グループに来ない、来れない現実→地域連携が必要。
8. 地域自治体、医療従事者の研修強化と家族との連携作業の徹底が必要